

5. 成祝祭りと杉野屋の人々

佃 田 直 史

- I. はじめに
- II. 成祝祭りの概要
- III. 成祝祭りの変化
- IV. 成祝祭りに対する人々の認識
- V. 考察
- VI. おわりに

I. はじめに

国道 159 号線の「杉野屋」交差点の一角一ちょうど集落の入り口にあたる場所一に「成祝の里」と書かれた木製の標柱が立っている。「成祝 [なりわい]」とは、杉野屋に存続する子供の成育儀礼である。毎年 2 月 9 日に、数え年 3 歳の幼児が両親らに付き添われて集落内の菅原神社に参詣し、健やかな成長を祈願するのである。

本調査で杉野屋を訪れた際、筆者は、杉野屋を特色づけるものとして人々の口からしばしば成祝祭りの名が真っ先に挙がること、また、上述したような標柱が立てられていることなどから、成祝祭りが杉野屋の人々にとって何か特別な意味を持っているように感じ、強く興味を惹かれた。筆者が「成祝祭り」をテーマとして選んだのはそうした理由からである。

以下では、まず II. で成祝祭りの歴史的背景および現在の姿について記述し、祭りの全体像を概観する。次に III. では、成祝祭りが現在の姿に至るまでに遂げてきた変化について、住民からの聞き取りや文献資料を手がかりに述べる。さらに IV. では、成祝祭りに対して人々が持っている認識を、彼（彼女）らの「語り」の中から浮かび上がらせる。その上で、V. で成祝祭りが杉野屋の人々にとっていかなる意味を持っているのかということについて考察したい。

II. 成祝祭りの概要

1. 起源

成祝祭りの起源については、『菅原雑記』なる書物に記述があったことが伝えられているが、菅原神社（志雄町菅原）の宮司のA氏によれば¹⁾、『菅原雑記』の所在は今日全く不明であるという。今日、祭りの起源を知ることができる（おそらく唯一の）資料は、「成祝（なりわい）祭りの由来について」と題された一篇の文章である。これは、口頭で伝えられてきた話を先代の宮司がまとめ、書き残したものである。志雄町の広報誌「広報しお」や地元紙では、毎年成祝祭りの様子が報じられるとともに、その起源についての記述がなされるが、それらの記述はいずれもこの「成祝（なりわい）祭りの由来について」を出所としているようである。そして、祭りの起源についての住民の説明は、こうした町の広報誌や新聞の記事から得た知識に基づいてなされる場合が多いようである。

以下に「成祝（なりわい）祭りの由来について」の概略を記す。

享保の頃、邑知平野一帯では日照り続きで作物の不作が起り、その上疫病が流行したため、多くの乳幼児が死亡した。この折、加賀藩の土木技術師・中橋久左衛門が杉野屋に溜め池を築造したところ、作物は豊作となり、乳幼児の死亡も減少した。こうしたことに對し、氏神と藩主へ感謝の気持ちを捧げるとともに、幼児の成長を祈願する目的で、1725（享保10）年から祭りが始まった。

文献によれば、享保年間に邑知平野一帯が深刻な飢饉に見舞われたのは確かなようで、当時、「能州口郡の儀、わけて耕作方不精」という風評もあったとのことである（『石川県土地改良史』、『河原市用水誌』）。この状況に對し、1724（享保9）年、藩の改作奉行であった別所忠兵衛が、用水の開削や溜め池の築造に造詣の深い河北郡の中橋久左衛門を廻口十村²⁾に任命し、現地査察を命じたのである。その後、久左衛門は、杉野屋はもとより菅原、藪野（宇土野）、柳田にも溜め池を築造している。菅原の菅原神社には久左衛門が神として祀られており、菅原と杉野屋では今日でも毎年、堤下の集落の代表者らが参列して「溜め池祭り」が行われている。また、杉野屋の2カ寺（安専寺と光照寺）では、毎年交代で報恩講（通称「堤の法事」）が営まれている。こうしたことから、この地域においては溜め池の築造が非常に大きな意味を持っていたことが推察され、その恩恵にあずかった杉野屋の人々が、氏神と藩主に感謝するとともに子供の成長の願いを込めて成祝祭りを始めたという話はおそらく史実に沿ったものであると考えられる。ただし、祭りが始められた年としての「1725（享保10）年」にどれほどの信憑性があるかという点については疑問が残る。というのは、杉野屋堤が完工したのは1727（享保12）年のことだからである。成祝祭りが始まった背景に杉野屋堤の築造があるのならば、その開始年は

1727年以降でなければならないはずである。祭りが始まった正確な年を特定することは本稿の目的とは直接関係がないため、ここではこれ以上の言及は避けることにするが、いずれにしても、享保年間に始まったのであるとすれば、成祝祭りは280年近い歴史を持っているということになる。

2. 成祝の神

文献によれば、杉野屋鎮座の菅原神社（通称「天満宮」）には、「成祝の神様として、古くから、「安永梵天」が祭られており」（『志雄町史』p.811）、「お太子様とも呼称される小さな木像が安置されている」（『石川県大百科事典』p.561）という。『町史』編纂に向け、1974（昭和49）年に古老たちからの聞き取りによって書かれたという当社の由来書にも、「本殿鎮座の御尊躰」として、

- ・天満宮 菅原道真 中央
- ・若宮八幡大神宮 応神天皇 右側
- ・白山宮 安永梵天 左側（なりわい神）

とあり、成祝の神として安永梵天（白山宮）が鎮座していることが記されている。

聞き取り調査を行った限りでは、神社に成祝の神が祀られているという話は聞いたことがあるという人は何人かいたが、それが「安永梵天」であると認知している人はほとんどいなかった。宮司のA氏も、成祝の神については何も聞いたことがないとのことであった。

成祝の神については、最後にもう1点言及しておくべきことがある。それは、1928（昭和3）年発行の雑誌『民俗藝術2-2』において、成祝祭りが「若宮八幡の成長祭」と記されていることである。この記述に従うならば、成祝の神は「安永梵天」ではなく、「応神天皇」ということになる。

このように、成祝の神を取り巻く状況は錯綜している。ただし、成祝の神を明らかにすることも本稿の目的とは関係がないため、これ以上の言及はここでは行わない。

3. 祭日

前述したように、毎年2月9日が成祝の祭日である。なぜ2月9日なのか。宮司のA氏によれば、杉野屋では元来、毎年2月9日には祈年祭があり、成祝祭りはその中の1つの祭りとして行われていたのだという。ところが、15年ほど前から、数え年3歳の幼児の成長を祈る珍しい祭りとして、成祝祭りが新聞や町の広報誌などのメディアで取り上げられるようになったことから、次第に人々の関心が成祝祭りに集中するようになり、その結果、成祝祭りが表面化し、祈年祭そのものは行われなくなったのだという（ただし、現在でも、区としての祭りが成祝祭

りに先立って行われる)。

では、そもそも成祝祭りが一年の豊穡を祈願する祈年祭の中で行われることとなったのはなぜなのだろうか。そこにどのような理由があったのかは定かではないが、成祝祭りが起こった背景に農作物の不作があることを考えれば一応の説明がつく。あるいは子供の成長のイメージが作物の生長のイメージと重なったためかもしれない。

成祝の祭日に関しては、もう1点言及すべきことがある。それは、この日には成祝祭りの他に、数え年で男性42歳の厄払い（初老の祭り）、女性33歳の厄払い、および男女61歳の還暦の祭りが行われているということである。こうした厄払い・年祝いの祭りは各地で見られるが、それらは元旦祭で行われるのが一般的である。では、杉野屋においてはなぜ2月9日に行われるのであろうか。A氏によれば、先々代が宮司の頃までは杉野屋では元旦祭は行われておらず、先代の宮司になってはじめて行われるようになったのだという。すなわち、それまでは、杉野屋における年初めの祭りは祈年祭であった。それゆえ、杉野屋では本来元旦祭に行われるべき男性42歳の厄払い（初老の祭り）と男性61歳の還暦の祭りが祈年祭の日に行われてきたのだという。女性33歳の厄払いと女性61歳の還暦の祭りが行われるようになったのは、ともにここ2、30年ほどのことであるという。

以上のような事情により、杉野屋においては、男女3歳の成祝祭り、女性33歳の厄払い、男性42歳の厄払い（初老の祭り）、男女61歳の還暦の祭りという、人々の人生の節目となる4つの通過儀礼（人生儀礼）が2月9日に集約される形となっているわけである。

4. 目的

繰り返し述べているように、成祝祭りの目的は、子供（数え年3歳の幼児）の健やかな成長を祈願することにある。

珠洲市清水町真浦では、2月6日に「若児（わかご）祭り」が行われる。若児祭りは、成祝祭り同様、「数え年三歳に達すると男女児とも成長を祈願する祭り」であるというが、それは同時に「幼児が付け紐をはずして若児に成長し、氏子入りする祭り」（『石川の祭り・行事』p.28）でもあるという。成祝祭りにはこうした氏子入りという目的はないとのことである。

5. 名称

祭りの名称については、「成祝祭り」（あるいは「成祝祭」）と表記されるのが一般的であるが、「成生祭」という表記がなされている文献もある（『石川県大百科事典』）。この「成生祭」という表記については、見知っているというインフォーマントが1人いたものの、詳細は不明である。また、複数の文献には「武勇祭」という別名の存在が記されているが（『民俗藝術』、『石川

県大百科事典』)、聞き取り調査を行った限りでは、今日この別名は全く残っていない。

「成祝」の発音に関しては、特に年輩の人々の間では、「ナリワイ」から転訛して「ナルワイ」と発音されることが多い。

6. 内容—成祝祭りの現在の姿

2003（平成15）年2月9日（日曜日）、筆者は実際に祭りを見る機会を得た。前述したように、2月9日には、成祝祭りの他に区としての祭りおよび各厄払い・年祝いの祭りが行われている。2月9日の日程は以下の通りである。

13:30～14:00 区の祭り

14:00～14:30 初老の祭り（男性42歳の厄払い）

14:30～15:00 還暦の祭り

15:00～16:00 成祝祭り、女性33歳の厄払い

ここでは、（区の祭りおよび各厄払い・年祝いの祭りを含めた）今年の祭りの様子を記述することで、成祝祭りの現在の姿を示すことにしたい。

①祭りの準備

祭り当日、正午過ぎに筆者が菅原神社を訪れると、すでに本殿および拝殿の扉が開かれており、境内では、ミヤガカリ（宮係）と呼ばれる神社の管理人を務める男性が手水舎の掃除をしているところであった。聞けば、午前10時半頃から、本殿・拝殿の掃除など、祭りのための準備を行っていたとのことであった。幣殿の案上には、すでに区の祭りのための神饌として、清酒の他、白米、ニンジン、キャベツ、ゴボウ、リンゴ、オレンジ、鯖、寒天、昆布といった海の幸・山の幸が4台の三方に盛り付けて供えられていた。

13時前には、区の祭りに参列する区長³⁾と氏子総代が礼服姿で神社を訪れ、準備を手伝いはじめた。13時過ぎには、一連の祭祀を執り行う2人の祭員（斎主を務める宮司のA氏と副斎主を務めるA氏の息子）も到着し、祭具や装束の準備にとりかかった。装束は、斎主が衣冠（正装）、副斎主が狩衣（常装）であった。

②区の祭り

すべての準備が整うと、両祭員は拝殿の上座で互いに向かい合って、区長と氏子総代は拝殿中央で横に並んで座る。13時30分、斎主の笛、副斎主の太鼓による能登神楽で区の祭りが始まった。まず副斎主が案前に進み、二拝の後、祓詞を読誦する。二拝二拍手一拝の後、大麻を執り、順に神饌、奉仕者（＝斎主）、参列者（＝区長、氏子総代）の前に至り、大麻を左右左と振り、修祓を行う。続いて斎主が案前に進み、二拝の後、祝詞を奏上する。祝詞では、成祝祭りおよび各厄払い・年祝いの祭りの催行が告げられる。二拝二拍手一拝をし、斎主が案前を退くと、

続いて区長、氏子総代により玉串奉奠が行われる。1人ずつ案前に進み、枝本が手前になる状態で受け取った玉串を、右回りに回転させ、枝本を神前に向けて捧げた後、二拝二拍手一拝をして案前を退く。氏子総代が玉串奉奠を終えたところで、再び能登神楽が奏でられ、神事は終了する。続いて直会に移る。三方に乘せられた朱塗りの大杯が用意される。案上に供えられていた神酒が、副斎主の手により下ろされ、大杯に注がれる。区長、氏子総代が順に神酒を授かる。こうして区の祭りは15分ほどで終了した。

③初老の祭り（男性42歳の厄払い）

区の祭りが終了すると、案上の神饌が下ろされ、引き続き行われる初老の祭り（男性42歳の厄払い）のための神饌が新たに供えられる。内容は区の祭りの神饌同様、山海の珍味であるが、品目・数量が増える。

やがて礼服やスーツに身を包んだ数え年42歳の男性たちが神社へやって来る。今年は3名が参列した。14時、初老の祭りもまた、能登神楽で始まった。まず斎主が案前に進み、大麻で案上の神饌を祓い清めた後、祝詞を奏上する。祝詞では、参列者1人1人の名が読み上げられる。祝詞奏上が終わると、斎主は参列者の方に向き直り、大麻を振ってお祓いを行う。続いて、参列者1人1人が玉串を捧げる。全員の玉串奉奠が終わると、再び能登神楽が奏され、神事が終わる。引き続き、参列者に神酒が献ぜられる。1人ずつ順に大盃で神酒を授かると、お守りが授与される。こうして初老の祭りは終了する。

④還暦の祭り

初老の祭りが終了すると、還暦の祭りのために再び神饌が供え換えられる。また、拝殿中央には参列者用の胡床が用意される。その間に、境内には還暦の祭りに参列する数え年61歳の男女が集まりはじめる。女性は和装・洋装、人それぞれの服装であったが、男性は皆、黒の礼服に赤いネクタイといういでたちであった。還暦は、生まれた年の干支に戻ることから「第二の誕生」と考えられ、その祝いには赤い頭巾、座布団、ちゃんちゃんこなどを送る風習が各地で見られる。赤いネクタイを着用するのは、その風習にちなんでのことだという。還暦の祭りにおける男性の赤いネクタイの着用は、杉野屋において定着しつつあるとのことである。

今年還暦を迎えたのは、男女各4名ずつ、計8名であった。14時30分、8名全員がそろい、胡床に着くと、還暦の祭りが始まった。祭りが行われる手順は初老の祭りのそれと同様であった。能登神楽に始まり、まず斎主による祝詞奏上と神饌の修祓が、続いて参加者1人1人による玉串奉奠が行われ、再び能登神楽が奏される。引き続き、参列者が1人ずつ神酒を授かり、最後にお守りが授与される。

⑤女性33歳の厄払い

例年、33歳の厄払いへの参列者は、結婚して杉野屋に来たばかりの女性である場合が多く、

また、人数も少ないため、成祝祭りの合間に1人ずつお祓いを受ける慣例になっているようであるが、今年は14時45分より、すでに神社を訪れていた3名が成祝祭りに先立ってそろってお祓いを受けた⁴⁾。参列者の服装は、和装・洋装、人それぞれであった。神饌の供え換えからお守りの授与に至る一連の流れは初老や還暦の祭りと同様であった。

⑥成祝祭り

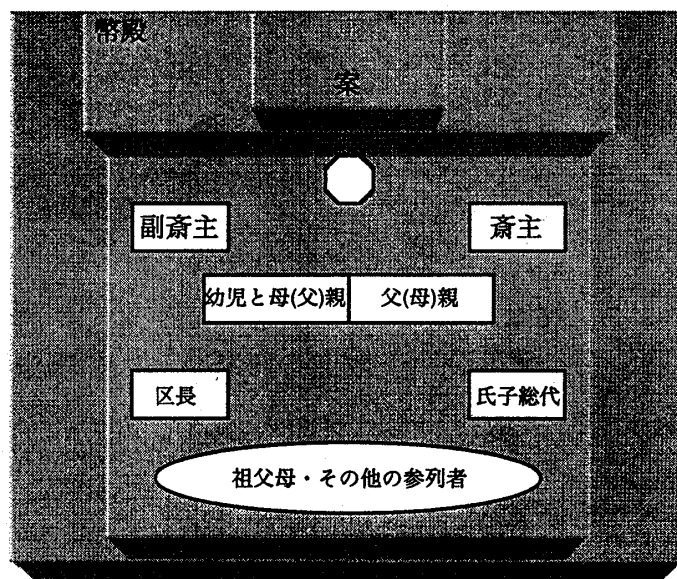
女性33歳の厄払いが終了すると、再び神饌の供え換えが行われる。また、拝殿中央には、赤と青の座布団が1枚ずつ用意される。

15時が近づくと、成祝の儀式を受ける幼児たちが、両親や祖父母らに連れられて神社へやって来る。今年は、集落内から3名、県外から2名（うち1名は集落内の祖母が代理で参列）の計5名の男児とその両親が儀式に臨んだ。どの男児も紋付羽織袴で着飾っていた。多くの母親はあでやかな着物姿、父親たちは礼服もしくはスーツ姿であった。

また、この頃になると、辺りも次第に賑やかになり、見ると、近所の人たちであろうか、20人ほどの人が境内に集まっていた。

参列者は、神社を訪れた順に1組ずつ儀式を受ける（したがって、自分たちの順番が来るまでは拝殿の下座で待機することになる）。儀式を受ける男児は、どちらか一方の親に抱きかかえられて青色の座布団に座り、もう一方の親が赤色の座布団に座る。女儿の場合ならば、赤色の座布団に座るのだという。成祝祭りにおける拝殿内の人員配置を以下に図示する。

図1 拝殿内の人員配置



成祝祭りは、区長、氏子総代が見守る中、15時より執り行われた。手順は他の祭りと基本的に同様である。まず能登神楽が奏される。例年ならば、太鼓の音に驚いて泣き出す子もいると

のことであるが、今年はそうしたことはなかった。続いて斎主が案前に進み、大麻で案上の神饌の修祓を行った後、成祝の祝詞を奏上する。そこでは、それぞれの幼児の名とともにその子の成長を祈る言葉が唱えられる。祝詞奏上に続いて、幼児にお祓いがなされる。その際、大麻ではなく、神楽鈴が用いられる。お祓いを受けた幼児は両親と共に案前に進み、玉串を捧げる。二拝二拍手一拝をして元の場所に戻ったところで、再び能登神楽が奏でられる。こうして神事が終了すると、続いて神酒が献ぜられる。この際、大盃ではなく、小さい盃で授かる。多くの幼児は盃を口につける程度で、父親が代わりに授かっていた。最後に、斎主より千歳飴の袋（中身はお菓子であるという）とお守りが授与され、成祝祭りは終了する。

成祝祭りの間、周囲では、孫の晴れ姿を写真やビデオに収める祖父母の姿が見受けられた。また、新聞記者や町の広報誌の担当者も訪れ、祭りの様子取材していた。

⑦祭りの後

初老の祭りへは、かつてはその年に数え年の42歳を迎える者が参列したが、近年、学年単位で参列するようになったという。また、杉野屋出身のすべての同級生に声かけられるため、杉野屋外に在住していても帰郷して祭りに参列する人もいるとのことである。こうしたことから、近年の初老の祭りは「同窓会」的な雰囲気強く、祭りの後には皆で七尾市の和倉温泉へ1泊旅行に出かけることが慣例となっているそうである。しかし、今年は、5名の該当者のうち、集落外在住の2名は参列せず、集落内の3名のみが参列した。その上、3名のうち、1名が弟の代理、もう1名が杉野屋に引っ越してきて間もない人であったため、例年のような「同窓会」的雰囲気はなく、祭りの後も特に何も行わないとのことであった。かつて初老の祭りの後には、家ごとに、親戚を呼んで盛大な祝宴を開いたり、親戚・近所に記念品（饅頭、餅、鮎子、鍋など）を配ったりしていたという。しかし、1960年代後半、生活改善運動の流れの中で、こうした慣習は廃止され、その代わりとして神社や区の備品を、初老を迎えた者たちが連名で寄贈することが行われるようになったという。過去の寄贈品の例としては、ストーブ1式（1985年）、獅子舞装束1式（1987、88、89年合同）、祭礼用長提灯および神輿用長提灯各6張（1990年）などがある。今年は寄付により前述の祭礼用長提灯6張の張り替えが行われるとのことであった。祭りに参列しなかった人も、この初老記念の寄贈には参加するという。

還暦の祭りも、初老の祭りと同様の理由から、「同窓会」的雰囲気強く、祭りの後は町内の飲食店で祝宴を開くことが慣例となっているそうである。

女性33歳の厄払いについては、前述したような事情から、例年個別に参列するため、初老や還暦の祭りとは違い、そこに「同窓会」的雰囲気はなく、祭りの後も特に何も行われぬとのことである。しかし、過去には全員そろって参列した女性たちもいる。彼女たちはこの33歳の厄払いへの参列をきっかけとして友達付き合いを始め、今日でも毎年1回親睦会を開いている

という。

成祝祭りについては、Ⅲ.で述べる通り、かつては祭りの後に家ごとで饗宴があったようであるが、今日では行われていない。今年の参列者に話を伺ったところ、どの家も家族で食事をする程度で、特別な祝い事はしないとのことであった。

Ⅲ. 成祝祭りの変化

前節では、成祝祭りが始まるに至った歴史的背景および祭りの現在の姿を見たが、本節では、成祝祭りが現在の姿に至るまでに遂げてきた変化について記述する。ただし、住民からの聞き取りおよび文献資料による遡及が可能な時期の限界から、ここでは1920年代以降、特に戦後の変化を中心にみていくことになる。

1. 幼児

まず、祭りの主役である幼児に関する変化から見ていくことにする。住民からの聞き取りにおいて、戦前は男児（それも裕福な家の子）しか参列しなかったが、戦後、両性の平等という思想の広まりとともに男女児ともに参列するようになったという話をしばしば耳にした。確かに、前出の雑誌『民俗藝術』（1928）には「本年三歳に達せし男子をナリハヒと呼び、盛装せしめて氏神に詣でる」とあり、かつては男児のみが対象とされていたことが窺える。ただし、インフォーマントの中には1930（昭和5）年頃に娘とともに成祝祭りに参列したという女性もあり、必ずしも女児の参列が認められていなかったわけではないようである。また、昭和初期に杉野屋の男性のもとへ嫁いで来たというインフォーマント（80歳代の女性）によれば、当時、姑が「近頃じゃオッサマ（次男）もメロ（女性）もみんな参るようになった」と言っていたとのことであるから、戦後、男女児とも平等に参列することが一般化したのはおそらく確かであろうが、戦前からその傾向はあったようである。

このように、戦前から戦後にかけては祭りの対象となる幼児の性別に変化が見られたわけであるが、戦後から今日に至るまでは祭りに参列する幼児の数に変化してきたといわれている。過去の町の広報誌および新聞を調べたところ、1986（昭和61）年以降の各年に成祝祭りに参列した幼児の数を知ることができた。それによると、10人近くの幼児が参列した年も幾年かはあるが、おおよそ毎年5人前後であり、少なくとも最近18年間においては、幼児の数にさほど大きな変化は起こっていないといえる。しかし、住民からの聞き取りによれば、それ以前は15人前後で推移していたようである。宮司のA氏が知る限りでは、第2次大戦直後のベビーブーム

の頃に24人が参列したのが過去最多であるという。このように戦後という長期的な目で見ると、成祝祭りにおいてもやはり少子化の傾向が表れているといえよう。そして、こうした幼児の数の減少は成祝祭りの光景を少なからず変化させてきたものと考えられる。

2. 同伴者

幼児に関する変化に続いては、同伴者の変化を見ていく。II.で見たように、今日の成祝祭りにおいては、両親が幼児とともに儀式を受け、その様子を祖父母（父方のみならず母方の祖父母も）がそばで見守るというのが一般的なケースのようである。しかし、両親がそろって我が子の成祝の儀式に臨む傾向が強まってきたのはここ20年ほどのことであり、それに祖父母が付き添うようになったのはごく近年のことであるという。かつては、成祝祭りに男性が関与するものとは考えられていなかったそうで、聞き取りからすると、1970年代以前は、母親のみ、もしくは母親と祖母が幼児に付き添って神社へ赴き、幼児とともに儀式を受けるというケースが多かったようである。すなわち、幼児の同伴者については、おおまかにいって「母親（と祖母）」→「両親」→「両親と祖父母」という変遷をたどってきたようである。

3. 服装

以上においては、成祝祭りに参列する幼児およびその同伴者に関して、おおまかな変化を見てきたが、ここでは特に彼（彼女）らの服装について取り上げ、それがどのように変化してきたかを記す。

まず、幼児の服装については、今日、男児ならば紋付羽織袴、女児ならば振袖が一般的であるが、こうした服装は1960年代頃から徐々に一般化してきたようであり、それ以前はその子の一番の晴れ着を着せたとのことである。

一方、同伴者の服装については、今日、父親は礼服もしくはスーツ、母親は訪問着、付け下げ、色無地といった着物、祖父母は普段着（ややフォーマルなもの）が一般的である。変化としては、母親の服装が20年ほど前から派手なものになってきたことが特に目立つという声がしばしば聞かれた。

4. 供進物

成祝祭りにおいては、供進物も多少の変化を遂げてきた。ここでの供進物とは、神饌と幣帛料を指す。

神饌には区で用意されるものの他、個人で持参するものもある。区で用意される神饌は、清酒、白米、野菜、果物、魚といった山海の珍味であるが、これは基本的に変化していないよう

である。変化が見られるのは個人で持参する神饌の方である。今日、清酒や白米を持参するが、かつてはそれに加え、各家で紅白の餅をついて持って行ったという。

幣帛料もまた個人で持参するが、その金額は人それぞれの心次第で特に決まっていなかったとされており、それがこれまでにどのような変化を遂げてきたかは定かではない。

5. 祭具

概して、神社の祭祀で用いられる祭具はあまり変化しないものであろう。しかし、成祝祭りにおいては、新たに取り入れられた祭具がある。その1つが、前述の赤と青の座布団である。以前は紅白の座布団が用いられていたというが、それは数十年前にある老人が寄付したものであったという。

もう1つ新たに取り入れられた祭具としては、幼児のお祓いに際して用いられる神楽鈴がある。宮司のA氏によれば、幼児のお祓いに際しては、かつては大麻を用いていたというが、成祝祭りへの人々の関心の高まりに合わせて、シャンシャンという良い音の鳴る金色の神楽鈴を用いることにしたのだという。ちなみに、この神楽鈴は前述の初老記念の寄贈品であるという。

このように、今日の成祝祭りに華を添えている2色の座布団や神楽鈴といった祭具は、祭りを取り巻く人々の心配りによって新たに取り入れられるようになったものである。

6. 授与品

今日の成祝祭りにおいては、最後に斎主より千歳飴の袋（中身はお菓子）が授与されるが、こうしたことは25年ほど前から行われるようになったようである。また、あるインフォーマントによれば、過去には、だるまの人形（起き上がり小法師）が授与されたこともあるという。

7. 祭りの後の祝い事

II.で述べたように、今日、成祝祭りの後には特別な祝い事はほとんど行われない。時々赤飯を炊いて親戚や近所にお裾分けをしたという家がある程度である。種々の文献によれば、かつては家ごとに親戚などを招いての饗宴があったようであるが（『志雄町史』、『民俗藝術』、『石川県大百科事典』）、聞き取り調査を行った限りでは、実際に饗宴を行ったという経験のあるインフォーマントはいなかった。ただし、比較的最近まで、家々で饅頭や餅を用意して親戚や近所に配るということはしばしば行われていたようである。

IV. 成祝祭りに対する人々の認識

以上で述べてきたような成祝祭りに対して、人々はどのような認識を持っているのだろうか。住民からの聞き取り調査を通じて、彼（彼女）らの中には、大別して4つのタイプの認識があることが浮かび上がってきた。

その第1は、杉野屋特有の慣習という認識である。杉野屋では「成祝のような祭りはこの辺りではうちの在所にしかない」という語りをしばしば耳にする。中には、「こうした祭りは全国でも数カ所にしかない」という語りも聞かれた。こうした語りには、成祝祭りを杉野屋特有の慣習と捉える認識が如実に表われているが、それが具体的な形となって表れたものが前述した「成祝の里」の標柱であろう。この標柱は1990（平成2）年に公民館（杉野屋分館）の活動の一環として立てられたものである。周辺の集落ではそれ以前から自集落の特色を「～の里」という形で謳った標柱を立てることが行われており、杉野屋でもそれに倣ったのだという。当時分館長を務めていた男性によれば、杉野屋の特色として何を掲げるかについては、分館運営委員会において話し合いが行われたというが、「成祝」以外の候補は特に挙がらなかったとのことである。このように、成祝祭りを杉野屋特有の慣習と捉える認識は広く人々に共有されているようである。インフォーマントの中にはこの認識が誇りや喜びと結びついている人もいたが、多くの人々においてはこの認識がそれ以上の何らかの感情と結びついているということはない。

第2は、集落の伝統行事（この「伝統」という言葉にはネガティブなニュアンスは含まれていない）という認識である。成祝祭りに関する人々の様々な言及のうち、「伝統のあるもの」（60歳代の男性）、「杉野屋のしきたり」（50歳代の女性）、「昔からのしきたり」（70歳代の男性）、「昔からのならわし」（50歳代の男性）、「しなければならないもの」（90歳代の女性）、「そうするもの」（80歳代の女性）等は、この認識の表れであるといえよう。事実、成祝祭りへの参列は任意であるにもかかわらず、集落内に居住する数え年3歳の幼児であれば、皆祭りに参列するという。仮に1年以内に身内に不幸があり、喪に服している場合は、例外的に翌年の成祝祭りに参列するとのことである。このように、成祝祭りは杉野屋において「伝統」としての権威を有しているようであるが、それはまた、多くの父親が休暇をとって祭りに参列しているという事実からも窺い知ることができよう。今年の成祝祭りに参列したある父親は、たまたま日曜日で仕事は休みであったが、仮に平日であったとしても、「伝統行事だから子供をきちんと参加させたい」という思いがあるため仕事を休んだだろうと語った。集落の伝統行事という認識の強さはまた、成祝祭りへの参列形態に多様性を与えている。例えば、今日の成祝祭りにおいては、杉野屋の出身者であれば、集落外に居住していても、我が子が数え年3歳を迎えると帰郷して、

成祝祭りに参列するというケースがしばしばある。実際、今年の成祝祭りにも富山県から参列した親子が1組いた。このケースでは、集落外に居住する地元出身者が自発的に帰郷して参列するというよりはむしろ、実家（杉野屋）の両親に呼び寄せられて参列するという場合が多いようである。昨年、東京在住の息子夫婦が孫を連れて帰郷し、成祝祭りに参列したというあるインフォーマント（60歳代の男性）は、「集落の行事だから、自分の孫だけ参加できないのはかわいそう」との思いから息子夫婦と孫を呼び寄せたのだという。ただし、呼び寄せたいと思っても、都合がつかず戻って来られない場合もある。そうした場合に、集落内に住む祖父母が孫の代理として祭りに参列するというケースもある。今年も東京にいる孫の代わりに成祝の儀式を受けた女性がいた。これまでも2度、孫の代理として成祝祭りに参列したことがあるというこの女性は、成祝祭りについて「昔からあるものなので、いいなあと思っている」と語った。

第3は、七五三の代替機能を持つ儀礼という認識である。聞き取りによれば、最近では羽咋市の気多大社（能登一の宮）でする人もいるようではあるが、杉野屋では七五三をする人はあまりいないとのことである。そこには、杉野屋を含めた能登地方に七五三という習俗が伝わったのは比較的最近であるという歴史的な事情に加えて、成祝祭りを七五三と同じ枠組みで捉える人々の認識が作用しているように感じられる。成祝祭りに関して、あるインフォーマント（60歳代の女性）は「子供の成長のひと区切り」と語り、またあるインフォーマント（50歳代の男性）は「3人の子供たちは1人として大きな病気をしたことがない。今になって思えば、これも成祝のおかげかなあと思う」と語った。これらの言及からすると、成祝祭りが、子供の成長段階における1つの節目を祝うとともに今後の健やかな成長を祈願するという、七五三と同様の機能を持つ儀礼として捉えられていることが窺える。実際、子供の七五三はしなかったというあるインフォーマント（40歳代の男性）は、その理由を「三つの成祝をしたから七五三をしたようなつもりでいた」と語った。成祝祭りを七五三と同じ枠組みで捉えるこのような認識は、儀式の最後に千歳飴の袋が授与されるということによって、外観からも強化されているようである。

第4は、地域活性化の原動力となるものという認識である。この認識の存在は、成祝祭りに関する「杉野屋を発展させていく祭りだから大事にしていきたい」（30歳代の女性）や「杉野屋を外に向けて発信するときの起点になってほしい」（宮司のA氏）といった語りから窺い知ることができよう。第1章でも述べられているように、今日、杉野屋においても過疎化は深刻な問題となりつつある。そうした状況に対する歯止め役として成祝祭りが何らかの役割を果たすことへの期待感が人々の中にあるのだろう。ただし、現段階において、成祝祭りを活用した地域活性化の具体的な実践や構想があるというわけではない。

V. 考察

前節では、成祝祭りに対する人々の認識として、①杉野屋特有の慣習、②集落の伝統行事、③七五三の代替機能を持つ儀礼、④地域活性化の原動力となるもの、という4つのタイプがあることを述べたが、本節ではそれらをもとに、成祝祭りが杉野屋の人々にとってどのような意味を持っているのかということについて考察する。

まず①の認識に着目したい。これは杉野屋の人々が文化的「他者」との関わり合いの中で成祝祭りを見つめることにより生じてきた認識であると考えられる。前節で述べたとおり、こうした成祝祭りの独自性に関する認識は広く人々に共有されている。しかし、その認識が誇りと喜びといった特別な感情と結びついているケースは少ない。その意味において、成祝祭りは人々にとって、杉野屋住民としてのアイデンティティの拠り所となっているとまではいい難い。しかし、彼（彼女）らが文化的「他者」との関係の中で「杉野屋らしさ」を表現する1つの手段にはなっているように感じられる。本調査の際、初めて杉野屋を訪れた私たちとの会話の中で、人々が集落を特色づけるものとしてしばしば成祝祭りの名を第一に挙げたことはその何よりの証拠である。

しかし、人々にとって成祝祭りが持つ意味はこれだけではない。ここで注目したいのが②の認識である。これは人々が集落の枠内で成祝祭りを捉えたときに生じる認識であるといえよう。成祝祭りは、祭りの主役として儀式を受ける幼児をはじめとして、その同伴者たる両親や祖父母、儀式を執り行う祭員、その様子を見届ける区長や氏子総代、あるいは祭りの準備をするミヤガカリや神楽太鼓の音に誘われて境内へやって来る近所の人など、地域の多くの人々の「行為」によって成立している。こうした「行為」をなすことは、それぞれの人々に期待された一種の「役割」であるともいえる。そして、そうした「役割」を果たすことで人々の中に地域社会の一員としての意識が喚起されているように感じられた。このように人々に各自の「役割」を果たさせ、祭りを成り立たせているのは、成祝祭り自体が有する「伝統」としての権威であると考えられる。すなわち、成祝祭りはその伝統的権威の下に杉野屋というコミュニティを統合する機能を果たしていると考えられるのである。

本章の冒頭でも述べたように、成祝祭りに対する筆者の興味は、本調査で初めて杉野屋を訪れた際にそれが杉野屋の人々にとって何か特別な意味を有しているのではないかと思ったことを出発点としている。それゆえ、本節では、杉野屋の人々が集落レベルのものとして成祝祭りを捉えたときに、それが彼（彼女）らにとっていかなる意味を有しているかということについて、ここまで考察を試みてきた。そして、人々が成祝祭りを集落の「ソト」との関係の中で捉えたときには「杉野屋らしさ」の表現手段、一方、集落の「ウチ」に目を向けて捉えたとき

には人々を結びつけ、コミュニティを統合するものとしての意味を持っていることを指摘した。前述の④の認識は、成祝祭りが有するこれらの意味を反映して生じたものであると考えられる。しかし、補充調査において、親あるいは祖父母として我が子や孫の成祝祭りに実際に参列した人々の話を聞く中で、彼（彼女）らが集落レベルのものとしてというよりはむしろ、家族レベルのものとして成祝祭りを捉えていることを強く感じた。筆者が彼（彼女）らと接する中で最も強く感じたのは、親ないし祖父母として理屈なく我が子や孫のことを想う心であった。子供が数え年3歳（満2歳）を迎える時期は、親や祖父母にとってはとにかく無病息災を祈りながらその成長を見守る日々であろう。そうした日々を送る中で迎える成祝祭りに対して、人々は前述の③の認識、すなわち七五三と同様の機能を持つ儀礼という認識を強く持っているようであった。つまり、人々にとって成祝祭りは、親ないし祖父母として、我が子や孫の健やかな成長に対する切なる願いを表現し、強化する場となっているということである。成祝祭りが人々にとってこうした意味を持っているということは、Ⅱ.で述べた成祝祭りの目的を考えれば、容易に想像のつく結論である。しかし、それこそが杉野屋の人々にとって成祝祭りが有する最大の意味であるように感じられた。

中には成祝祭りがさらなる意味を有している人々もいると考えられる。そこで注目したいのが、集落外に居住する地元出身者が子供を連れて帰郷し、参列するというケースである。今回の調査では、集落外からの参列者に話を伺う機会がほとんど得られなかったため、彼（彼女）らにとって成祝祭りがいかなる意味を有しているかについて、ここで考察を行うことはできない。しかし、実家（杉野屋）の両親にとっては、それは息子（娘）夫婦と孫を呼び寄せ、会う機会を提供してくれるものとしての意味を持っている。前述したように、集落外に居住する地元出身者が成祝祭りへ参列するケースでは、実家（杉野屋）の両親が呼び寄せている場合が多い。成祝祭りに息子（娘）一家を呼び寄せる人々の心の内には、一方で前述の②のような認識が作用しているようである。しかし一方で、そこには親や祖父母としての真意も見え隠れしているように思われる。そこに、息子一家（この場合、娘一家ということは考えにくい）が成祝祭りへの参列をきっかけとして故郷を見つめ直し、将来的に杉野屋へ戻って来ることまでの期待感があるかは定かではない。しかし、少なくとも、普段は離れて暮らしていても、成祝祭りを利用して会う機会を設けることで、親として祖父母として子や孫との絆を持ち続けたいという思いがそこには表れているように感じられる。

VI. おわりに

聞き取り調査を通じて、人々の口からは成祝祭りの今後の維持・存続に関して消極的な声は聞かれなかった。多くの人がこのまま続いていくことを予想しており、また、続ける意思を持っている。杉野屋では近年、人々の関心の低下が要因となり、先に述べた祈年祭の他、虫送り、鎮火祭（年に2度あったうちの一方）といった祭礼が姿を消している。この点、参列者自身が高い関心を持って自らの意思で参列していることは成祝祭りの「強み」であろう。しかし、すでに述べたように、過疎化・少子化の波は今日杉野屋にも押し寄せている。こうした事態が今後さらに進行すれば、成祝祭りにも少なからず影響を与え、そのあり方に何らかの変化をもたらすであろう。特に祭りの性質上、少子化は看過できない問題である。いくら祭りを続ける意思があっても、子供がいなくなれば成祝祭りは成立しない。このように、祭りを取り巻く状況は厳しく、成祝祭りの未来は決して安泰とはいえない。しかし、そうした状況だからこそ、逆に前述の④のような認識が強まり、成祝祭りはかえって大切にされていくのではないかという声も聞かれた。いずれにしても、今後祭りを取り巻く状況が変化すれば、人々は何らかの対応を迫られることになるだろう。そうした中で、杉野屋の人々にとって成祝祭りの有する意味がいかに変化していくか（あるいは変化しないのか）に注目していくことにしたい。

注

- 1) 菅原は、杉野屋の南部に位置する集落である。A氏は菅原、杉野屋の両菅原神社を含めた志雄町内の3集落および羽咋市の4集落における計7社の宮司を兼任している。
- 2) 「十村」とは、「加賀藩独特の名称で、他藩でいう大庄屋のことで、郡内を数ヶ組に分けて一〇村程度の支配をまかされたことから十村といったもので、農村支配の地方役人」を指す。中でも「自分の担当する組以外へ出向いて、特別の技術を授けたり、示談に加わった」りしたものを「廻口十村」という（『河原市用水誌』pp.204-205）。
- 3) 実際は、区長は用事のため区の祭りには参列せず、裁許を務める男性が区長代理として参列した。ただし、初老の祭り（男性42歳の厄払い）以降の祭りには区長が参列していた。
- 4) 後から神社を訪れたもう1人の数え年33歳の女性は、成祝祭りの合間にお祓いを受けていた。